

甲府一高あおぞら会 年報 2021

AOZORA

2022年3月4日発行(年1回発行) vol.7

〒252-0233 神奈川県相模原市中央区鹿沼台1-7-7

おぐちこどもクリニック内 甲府一高あおぞら会

ホームページ <https://ymkp.net/aozora/>

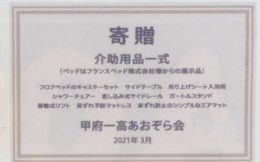
2021年 活動報告

甲府一高あおぞら会会長 露木和雄

依然として、日常生活でのマスク着用が当たり前前の状況が続いておりますが、会員の皆様におかれましてはいかがお過ごしでしょうか。私は昨年11月、久しぶりに白州のあおぞら共和国を訪れる事が出来ました。入口にゲート(仁志田ゲート)が新設され、東の通りの桜の木々も大きく成長していました。

昨年、認定NPO法人難病のこども支援全国ネットワークに寄付された皆様からの会費は、一昨年完成した5号棟の移動式リフトなど介護設備の購入に充てられた物品それぞれに甲府一高あおぞら会寄贈のシールが貼られました。11月には当会立ち上げに尽力した小口弘毅当会実行委員が(公財)ソロプチミスト日本財団社会ボランティア賞を受賞しました。(P8別掲)

私が当会の活動に携わるきっかけを与えてくれた彼の受賞は、私のみならず関係者にとっても本当に大きな喜びです。終わりに、皆様のご健勝をお祈りするとともに、今後も引き続き当会への厚いご支援をよろしくお願いいたします。



あおぞら共和国の現状とこれから

認定NPO法人難病のこども支援全国ネットワーク 専務理事 福島慎吾

“あおぞら共和国”のご利用者は2021年12月時点の累計で延べ7,956名にのぼり、もう少しで8,000名になります。ここまで続けてこられたのも、甲府一高あおぞら会をはじめとする多くの皆様の温かく力強いご支援のたまものです。この場をお借りして心から感謝を申し上げます。

今年のトピックスは、7月16日で「みんなのふるさと“夢”プロジェクト」が10年目になったこと、正門ゲート(仁志田ゲート)が完成したこと、あおぞら里山づくりがあげられます。夢と言う言葉に相応しないほどの盛りだくさんの初期の計画が、驚くほどのスピードで建物が建ち、完成に近づいております。正門ゲート(仁志田ゲート)の4本のアーチは難病の子どもを支える4本の腕をイメージしています。1本目は家族の支え、2本目は社会の支え、3本目は医療従事者の支え、4本目は仲間の支えです。あおぞら里山づくりは、サントリー白州工場から毎月第三水曜日に社員10名が来て、あおぞらの森の周回路の下草刈りや丸太の柵作りやツリーデッキ作りなどを行ないました。あおぞら共和国にお越しの際は、ぜひあおぞらの森にお立ち寄りください。

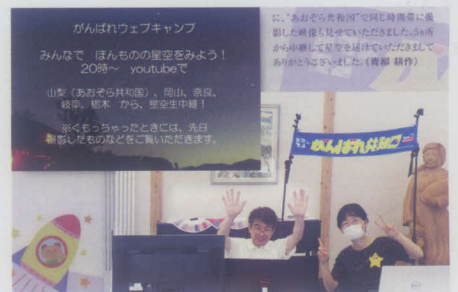
本年は1年を通じて様々なイベントを開催し、地域の方々を含めて、より親しみやすく利用しやすい“あおぞら共和国”に育てていきたいと考えています。これからも変わらぬご指導、ご支援をよろしくお願いいたします。

難病ネットのあおぞら共和国関連イベント

認定NPO法人難病のこども支援全国ネットワーク あおぞら共和国担当 青柳耕作

『がんばれ共和国』報告 『がんばれ共和国』とは、“あおぞら共和国”と名称が似ていますが、施設の名前ではなく、難病のこども支援全国ネットワークが30年前より全国(現在7ヶ所)で開催しているサマーキャンプの名称です。難病のあるこどもたちとその家族が気兼ねなく、安心してのびのびと過ごせるキャンプを開催できるようにと、そして個々の家族単位でものんびりと休暇を過ごせるようにと建設された“あおぞら共和国”の原点がこのキャンプ『がんばれ共和国』にあります。毎年、このキャンプの参加者からはたくさんの感動と喜びの声が寄せられます。しかし、コロナ禍により一昨年よりWebでの開催となりました。

2020年、2021年のWebキャンプでは、星つむぎの村(移動プラネタリウム、星空観望会、星や宇宙に関するワークショップを開催している一般社団法人)の皆さんにも登場していただきました。2021年のWebキャンプの午後の部では、歌手の平原綾香さんが歌っている星つむぎの歌の歌詞が、星つむぎの村のメンバーの皆さんの手話で表現されました。サビの部分を手話で教えていただいたので、みんなで一緒に“手話で歌って楽しむことができました。夜の部「みんなでほんものの星空を見よう!」では、山梨県の“あおぞら共和国”、岡山県、奈良県、岐阜県と栃木県から星空の生中継を行っていただきました。奈良県からは望遠鏡で木星を、岐阜県恵那市からは、人工衛星、天の川、イルカ座、北斗七星、北極星、冠座などの映像が送られました。栃木県那須塩原市からは、アルクトゥルスと言うオレンジ色に光る1等星やヘラクレス座付近の球状星団も、そして“あおぞら共和国”からは、夏の大三角形や北斗七星などが中継されました。各地から見える星空を存分に楽しむことができました。



“みんなのふるさと夢プロジェクト”(以下夢プロジェクト)が始まって2021年7月16日でちょうど10年目となりました。予想を超える早さでプロジェクトは進み、現在建築面ではほぼ完成に近づいています。

最近では重い障害あるいは難病を抱え、さらには医療的ケアが必要な子ども達でさえ病院から退院し、家族による在宅介護を受けながら暮らし成長しています。しかし、現実は一層厳しく、その支援体制は未だ不十分であり、おおぞら共和国は家族にとって希望の灯火になるでしょう。

夢プロジェクトが始まった頃に、私は世界で初めての子どもホスピス、ヘレンハウスの誕生物語“A House Called Helen”に出会い、その翻訳を思い立ちました。2018年に刊行した翻訳書“ヘレンハウス物語”は素晴らしい内容の本なので、より多くの方々に読んでもらう為に、ダイジェスト版を作成する事を考えました。しかし、“ヘレンハウス物語”の紹介と夢プロジェクトの物語をうまく組み合わせる方がより良いものが出来ると考え、小冊子“おおぞら共和国物語”を構想し、製作中なので紹介致します。

夢プロジェクトの萌芽

東京女子医大小児科名誉教授の仁志田博司は、2010年暮れに認定NPO法人難病の子ども支援全国ネットワーク(以下難病ネット)から難病の子ども達のためのレスパイト村建設を依頼されました。夢を託された仁志田博司は当時を次のように回想しています。「私は長い間新生児医療に携わってきたので、NICU退院後に障害を持って社会の中で生きていかなければならない子どもたちのことが、いつも心に掛かっていた。天啓のように、これこそ私がしなければならない仕事かなと思った。」

難病ネット(1988年設立)の設立に関わった小林信秋の長男大輔は、1979年に可愛い盛り5才でSSPE(重急性硬化性全脳炎)を発症し、国立小児病院に入院しました。大輔の入院中にSSPEの子ども2人が入院してきました。SSPEは小さい時にかかったはしかのウイルスが、脳細胞に感染し長い間潜伏した後、再活性化により脳細胞の破壊が進み、数年の経過でほとんど死亡します。3人の母親達は、子どもに付き添いながら情報交換をしていました。その結果、1984年12月に小林信秋・洋子夫妻が中心となり、SSPE患者・家族の会(SSPE青空の会)が生まれました。

全ての始まりである小林家の物語の一部を紹介します。追悼文集“大輔へ”(大輔の死後10年目に編纂)から引用します。

「大輔の闘病と死は、私たち家族にとっては忘れることのできない衝撃でした。今も息子を思わない日はありません。私にとって大輔の思い出に浸る時間は至福のときです。---大輔、元気してるか?父さんにとってお前は希望だったり夢だったり、未来そのものだったりするんだ。」小林洋子さんの回想文から「長期入院から退院。母さんがドアを開けるのを、大輔は父さんに抱かれて待っていました。父さんが“大輔、家に帰ってきたよ”と話しかけると、嬉しそうにニコリ。父さんも母さんもびっくり。織恵と愛が駆け足で学校から帰ってきました。二人とも大輔のそばを離れようとせず、大輔をじっと見つめていました。-----プレイルームでテレビを見ている大輔。手が小刻みに震えている。ちょっと膝に乗せて抱いてみる。手だけではなく全身がけいれんしている。外からは見えないだけ。私は大輔の苦しみ全然わかっていない。-----やがて激しい大発作が大輔を襲ってきました。苦しみながら発作に耐える大輔。もう見ていられません。やっとな大きな発作が落ち着いてきた頃、大輔は自分の意思では生きられなくなっていました。しかし何も話せなくても、何もできなくても、大輔は生きてくれました。-----大輔を愛した家族と先生たちに見守られ、1988年5月25日に13歳の大輔はたった一人で旅立ちました。」

大輔の死後に難病ネットが設立され、そして毎年全国各地でサマーキャンプを実施していました。アメリカでは1988年に、俳優のポールニューマンが難病や障害のある子どもに向けた自然豊かなサマーキャンプ“The Hole in the Wall Gang Camp”を建設しています。およそ30万坪の広大な敷地には湖や街まであり、子ども達は大騒ぎをし、友情を育み、仲間たちと冒険に挑戦するのです。1998年に、小林信秋はそのサマーキャンプに招待され、キャンプの素晴らしさに感動しました。



The Hole in the Wall Gang Campのホームページより

ヘレンハウスの誕生とその発展

大輔がSSPEを発病した頃、海の向こうの英国では、1978年8月に2歳半の愛らしい女の子ヘレンは脳腫瘍を発症し、手術後の重い後遺症を抱えての大変な在宅介護生活から、こどもホスピスの萌芽が生まれようとしていました。ヘレンの母親Jaqueline Worthwickは、こどもホスピスの誕生と発展について”A House Called Helen”(Oxford University pressより2000年に刊行)を著しています。まずヘレンの発病と、その後の在宅生活についてヘレンハウス物語から紹介しましょう。手術後に「入院していても治療法はない」と告げられた両親はヘレンを家に連れ帰りました。「ヘレンは植物状態となりましたが、彼女への深い愛は変えることはありませんでした。そして“ヘレンは家族の温かさと愛に包まれて一緒に家で過ごすべきだ”と確信しました」この一節は、まさに在宅医療の原点です。-----自宅に戻り玄関を閉めた瞬間から、病院で大きな支援を受けていた事を思い知らされました。我が家は愛に溢れ、家族の声、ラジオの音そしてヘレンを快適にする環境がありましたが、現実には想像以上に過酷でした。しかし季節が冬から春へと移りゆくように、ヘレンは、徐々にくつろぎ、こわばりも少なくなりました。まるで愛の力で暖められているようでした。その年の初夏には、ワスレナグサが庭を埋めつくし、風や小鳥のさえずりは慰めを届けてくれました。」

「重い病気のこどもや障害を持ったこどもの両親は皆、喪失感に苦しんでいます。それは彼らが夢に描いてきた幸せで健康なこどもとして当然生まれてくると期待していたこどもの喪失感なのです。ヘレンが元気だった頃、幼児音楽教室と一緒に通っていた友達が幼稚園に入園した日の様子を鮮やかに憶えています。その日、その友達と同じように誇らしげに、磨き上げた靴を履いた明るい瞳の小さな女の子に成長したはずのヘレンを失った現実を思い知らされたのです。」

「私たちにとって“疲労”は大きな問題であり、しかも落ち込む時間さえもないのです。ヘレンの基本的なニーズ(食事、着替え、身体の清拭、与薬、リハビリテーション、体位変換)に一日中応えるのは大変です。しかも深い悲しみが心の奥底に常にあり、その悲しみが湧き上がるたびにエネルギーを奪われるのです。」

「ヘレンと暮らしながら、私たちは難病のこどもを自宅で看病している家族に、友人として接し、介護や、心のサポートを提供する場所を設立する夢を抱き始めました。そこは“小規模で家庭的で、こどもを一人の人間として尊重する場所”です。その時を境に、ヘレンを襲った悲劇はこどもホスピス設立に向かい始めました。」

地元オックスフォード地域で始められた募金活動は英国全土を巻き込む熱烈なエネルギーを生み出していきました。大人だけでなく多くのこども達が小遣いを貯めて、差し出しました。ヘレンの発病からわずか4年3ヶ月後の1982年11月にヘレンハウスは誕生したのです。ヘレンハウスの目標は心身ともに親の負担を軽減する事です。

その一節を引用します。「ヘレンハウスは純粋に身体的な重荷を軽くして、大いに息抜きになります。ヘレンハウスに滞在する間、親たちは単に身体的負担が軽減されるだけではなく、それ以上に精神的ストレスも軽減されます。“ほんの少し寄りかかる” “どんな感情でも受け入れられる”と感ずるのです。」

ヘレンハウスで亡くなったこどもの両親の回想の一部を引用します。「脳腫瘍のためにヘレンハウスで亡くなった幼い少年の両親は次のように回想しています。“ヘレンハウスで支援を受けられると知っていましたが、息子が生きられるという望みを諦めきれず、ホスピスの利用を拒否していました。”在宅介護が困難となって初めて、ヘレンハウスに目を向けました。滞在して間もなくスタッフは私たちの悩みを共有し、最期のときに私たちが背負ってきた重荷を軽くしてくれました。病気のこどもたちの希望がヘレンハウスにはあります。」別の家族は「幼い少年はヘレンハウスで終末期を迎えようとしていました。両親は少年をプレイルームに連れて行き音楽を楽しみ、とても幸せなひと時を過ごしました。その日の終わりに、少年は母親の腕の中で亡くなりました。母親は、“息子は人生の最期に明るい光に包まれていた”と回想しています。」

夢プロジェクトの始動

“The Hole in the Wall Gang Camp”見学後、思いがけない申し出に接した小林信秋は、次のように書いています。「難病ネットの活動を始めた当初からご支援いただいている会社の社長さんに、ポール・ニューマンが作ったキャンプ場の話を聞いて、こんなものがあると良いな～とお話したら、“使っていない3,000坪の土地が山梨県白州にある。自由に使っている”と言ってくれました。私たちの夢が叶うような機会が正に与えられています。」

1992年に“友達作ろう”を合い言葉に富士山麓で第一回サマーキャンプ“がんばれ共和国”が開催され、700人が参加しました。現在では“がんばれ共和国”は毎年全国7か所、約1,000人が集う大イベントになっています。難病の弟に付き添って何年もキャンプに参加していた姉が、その弟が亡くなった後もキャンプに参加して障害のあるこどもの世話をしていました。姉はその理由を“自分の弟が世話になった恩返しという気持ちもありますが、それ以上にキャンプに参加することが私の夏の行事であり、ここは私のふるさとです”と述べています。

古稀目前の仁志田博司は夢プロジェクトのキャンペーンとして、まず難病ネット事務所のある水道橋から白州までの173kmを4回の週末を使って歩くチャリティーウォーク日本版マーチオブダイムを実施し、マスコミの注目を集める事に成功しました。このウォークは里山ウォーク(日野春駅からゴールのあおぞら共和国までの12km)に引き継がれ、里山を歩くことで甲府一高同窓生の眠っていた強行遠足魂が呼び覚まされ、彼らの多くは熱心な支援者になってくれました。

夢プロジェクトの募金活動の基本は大口の寄付のみに頼るのではなく、人々の善意に語りかける草の根運動です。およそ1年半で2,000万円の浄財が集まり、土木工事に踏み切ることができました。小林信秋は、夢プロジェクトが始まったばかりの頃を次のように振り返っています。「サマーキャンプ“がんばれ共和国”を既存の宿泊施設をお借りして長く開催してきました。学生ボランティアがこども達を入浴させていたら、同宿者が“あらいやだ、汚い”と言って出て行つたと、泣きながら報告してきた事がありました。こんなことを何度も経験して、“いつか気兼ねなく過ごせる場所が欲しいね”と話すようになりました。実行委員会を開いて、どんな施設を作るのか、どのように使うのか、どうやって維持していくのか、そんなことを何度も話し合い、宿泊棟を6棟、お風呂棟を2棟、キッズボックス(子供の遊ぶおもちゃと絵本が一杯の小屋)1棟、センター棟1棟を建設しようと構想をまとめました。」

建築経過やイベントもいくつか紹介しています。

ほぼ構想通りに夢プロジェクトは進み、今では建築面はほとんど完成しています。以下に建築面の歩みについて列挙します。



- 2014年3月 ロッジ1号棟
- 2014年12月 ロッジ2号棟、浴室棟
- 2015年9月 ロッジ4号棟
- 2016年4月 ロッジ3号棟、フェアリーロード(周回路の半分)
- 2017年2月 屋外ステージ
- 2017年12月 KID'S BOX(おもちゃあるいは絵本小屋)
- 2019年3月 小林登記念ホール(交流棟)
- 2020年5月 ロッジ5号棟
- 2021年1月 山寺ロード(周回路の残りの半分)
- 2021年9月 正門ゲート(仁志田ゲート)(左写真)

2018年に“日野皓正 Quintet Charity Live inあおぞら共和国”を開催。このイベントに参加した仁志田博司は次のように語っています。「参加者の要望に答え、何とソロで『ふるさと』を演奏してくれた。その時、彼は何気なく“この広い緑の庭に野外ステージがあれば良いんだが”と呟き、その言葉通り、野外ステージをプレゼントしてくれた。野外ステージの柿落としに、フルバンドを引き連れて100人弱の地元の聴衆のためだけに演奏してくれた。そして小林信秋の孫娘の雪乃さんがトランペットを習っていることを聞いた日野さんは一緒に演奏したのである。」



2018年4月20日、大規模なこども祭りが開催されました。

ボランティアも含めて参加者は130人に達し、交流棟ではプロのバイオリニストによるバイオリン演奏、星つむぎの村による移動式プラネタリウム、野外舞台ではジャズ歌手の歌、飛び入りのギター演奏が行われました。昼食会にはほうとう作りの実習、料理人が作った鯛めしが振舞われました。午後には5kmの絶景ウォークも実施されました。

これだけの字数では小冊子「あおぞら共和国物語」は語り尽くせません。数ヶ月後には皆様のお手元に配布致しますので、どうか楽しみにして下さい。

あおぞらの森

「あおぞら共和国」には、ロッジが建っている敷地以外に、ほぼ同じ面積の森があることは、昨年の年報でご紹介いたしましたが、その後さらに作業が進んでいます。当初は人手が入っていなかった為、アカマツや灌木類が生い茂る荒れた森でしたが、下草刈りや倒木の恐れのある木の伐採、伐採した木による薪作り、周回遊歩道の砂利敷き詰めや柵設置などにより、着々と整備された森になってきました。森の奥には、難病で亡くなった子どもを偲ぶために植樹した広場も出来ています。広場には、四季折々で花や紅葉を楽しめる樹木が整備され、森で伐採した松材で作ったゲートや休憩できるベンチやテーブルも完成しています。これらの作業は、埼玉の森づくり集団“栞”や、毎月一回定例で来てくださっているサントリー白州工場の皆さま、地元在住の甲府一高あおぞら会会員が活躍するボランティアグループなどにより行われています。コロナ禍が収束し、緑あふれる「あおぞらの森」を会員のみなさまと一緒に散策できることを願っています。



あおぞら共和国のご利用方法

みなさまのお知り合いで、あおぞら共和国を利用したい方はいらっしゃいませんか？『車椅子利用者だけど、のんびり家族で旅行したい』とか、『動き回る子なので一般のホテルは利用しにくい』とか…。あおぞら共和国ならその願いが叶います。あおぞら共和国は、“みんなの別荘”です。“別荘”なだけに、自炊・パジャマなど持参と制限もありますが、気兼ねなくロッジ滞在が楽しめます。利用できる方は、①難病や障がいのある子どもとその家族②その関係者や支援者③難病ネット会員（正会員・賛助会員・購読会員）です。詳しくは、運営している、難病の子ども支援全国ネットワークの事務所（所在地：東京都文京区）にお尋ねください。
あおぞら共和国の所在地：山梨県北杜市白州町鳥原2913-134 HP：<https://www.nanbyonet.or.jp/infomation/kyouwakoku.html>
電車でお越しの方：JR中央本線「小淵沢駅」よりタクシーで約10分 自動車でお越しの方：中央自動車道「小淵沢IC」より車で約15分

Q&A 皆様からの質問と回答

質問事項、ご提案を事務局までメールでお寄せください。ホームページに回答を掲載し、一部は年報に掲載いたします。

Q 難病の子ども支援全国ネットワークとは、あおぞら共和国の運営の他にどんな活動をされているのですか？

A 難病ネットの青柳耕作さんに回答をいただきました。

難病の子ども支援全国ネットワークは、設立33年になる認定NPO法人です。事務所は水道橋にあります。電話相談室、全国7か所でのサマーキャンプ、親の会活動の支援、ボランティアの養成、シンポジウムの開催などを行い、病気や障がいのある子と家族の「いのちの輝き(QOL)」の維持・向上に努めています。それらの活動の一つとして、あおぞら共和国の建設・運営があります。(詳しくはP7参照)

あおぞら共和国近くの『みどころ・あじどころ』 その6(毎号連載)

北杜市オオムラサキセンター

オオムラサキセンターは、本館・森林科学館・生態観察施設「びばりうむ長坂」の3つの施設から成り、施設の周囲に約6haのオオムラサキ自然公園が広がっています。館内では、一年を通じてオオムラサキの生態を観察することができます。

営業時間 [通常]9:00~17:00 [7月~8月]8:30~19:00 [12月~3月]9:00~16:00

休館日 月曜日(祝日の場合はその翌日) 祝日の翌日(土・日曜日の場合を除く)

夏季無休(7月下旬~8月)※ その他、臨時開館、臨時休館あり

日野春駅から約700m、徒歩約15分 ホームページ<http://oomurasaki.net>

山梨県北杜市長坂町富岡2812 TEL.0551-32-6648



2021年甲府一高あおぞら会の会務報告(紙上総会)

2020年に引き続き2021年もコロナ禍のため、あおぞら共和国での活動が全く出来ず、総会も中止致しました。甲府一高あおぞら会総会は、あおぞら共和国での行事に合わせた不定期開催でしたが、それが困難なため、昨年度から毎年2月に発行する年報に、甲府一高あおぞら会の会務を報告し、総会に代えさせていただいております。

1.活動/会務報告 事務局 山本秀彦 (2021年1月1日~12月31日)

- ◆ コロナ禍により、あおぞら共和国での会の活動、イベントへの参加/支援、同窓会での活動は出来ませんでした。実行委員会は2回(内1回はオンライン)開催し、随時メールでの連絡で対応しました。
- ◆ 役員は2021年に決定された体制で、2023年まで8ページに掲載した実行委員が対応いたします。

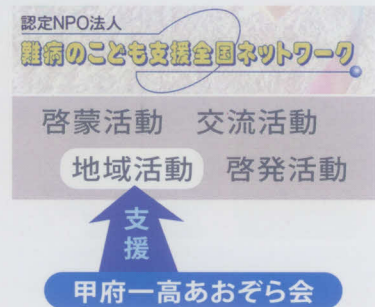
2.会計報告 会計 田伏純子 (2021年1月1日~12月31日)

- 1) 収入 = 合計 1,633,876円 会費 = 1,056,000円 12月末の会員数421名 (会費納入者は352名)
寄付金 = 577,876円 寄付金、会員の皆様からの個別の寄付金
- 2) 支出 = 合計 155,126円 事務費 = 74,530円 支払手数料、通信費 広報費 = 80,596円
- 3) 支援金 = 1,478,750円 今年度は全額夢プロジェクト口座に振り込みましたが、用途につきまして、今後難病のこども支援全国ネットワークと話し合い、一部を用途を確定した要請費用に特化して使っていただきます。

今までの支援金の累計額は 13,668,702 円となりました。

3.甲府一高あおぞら会のあおぞら共和国支援と難病ネット活動について

- ◆ 難病のこども支援全国ネットワークの仕事(以下難病ネットと略記)難病ネットの活動は 1.電話相談や遺伝特別相談、ピアサポートなどの相談活動 2.岩手から沖縄まで全国7か所でのサマーキャンプ“がんばれ共和国”建国、親の会連絡会、サンタクロースの病院訪問などの、交流活動 3.子どもの難病シンポジウムや病弱教育セミナー、自立支援員研修会などの啓発活動 4.あおぞら共和国をはじめ積極的な地域活動を行っています。 <https://www.nanbyonet.or.jp/infomation/>
- ◆ 甲府一高あおぞら会は、上記難病ネットの4つの大きな活動の内、地域活動の「あおぞら共和国」の構築、運営、維持の支援を行っています。



会費納入(会員の更新)とお知り合いの勧誘(新規入会)及び、支援のお願い

年報AOZORAに同封しております、ゆうちょ銀行の振込用紙にて、会費納入(会員の更新)をよろしくお願いたします。

- ◆ 会費納入先: ゆうちょ銀行 口座名: 甲府一高あおぞら会 口座番号 001 10-9-323825
2022年1月17日より、ゆうちょ銀行の赤色振込用紙(料金加入者負担)をお使いいただいても、現金で支払いを行う場合は、110円の費用を振込者が負担していただく(ゆうちょ銀行口座からの支払いは無料)こととなりましたことをご了解願います。その他の振込方法も振込手数料は自己負担となりますが、ホームページをご参照の上よろしくお願いたします。
https://ymkp.net/aozora/kaihi_nonyu.html
- ◆ 甲府一高同窓生に限らず、一般の方もご入会いただけます。ご友人等、ご紹介いただいた方に、事務局より、本会の紹介、加入申し込み用紙、会費振込用紙等をお送りいたします。事務局の連絡先は巻末のお問い合わせ先をご覧ください。
- ◆ 「あおぞら共和国」への支援は各種の方法で (https://ymkp.net/aozora/aozora_sien1.html)
 1. ゆうちょ銀行会費振込用紙で会費と寄付金を同時に納入頂く場合は、印刷された3,000円に取消線を引き、押印し、合計金額を上空欄部分に記載してください。その場合通信欄に明細(会費3,000円、寄付¥¥¥円)を記入してください。
 2. あおぞら共和国の建設・運営母体である認定NPO法人「難病のこども支援全国ネットワーク」の会員となつていただく。本会入会時にその旨お伝えくだされば、本会会費は免除としております。
 3. 個人名での随時寄付をご希望の方は
ゆうちょ銀行 加入者名: みんなのふるさと夢プロジェクト 口座番号: 00140-5-472963 にお振り込みください。
上記口座への支援は税法上の優遇処置の対象となり、確定申告時、税金の控除が受けられます。

(公財) ソロプチミスト日本財団社会ボランティア賞受賞

甲府一高あおぞら会会長 露木 和雄

前述いたしましたように(P2)、昨年11月に小口弘毅当会実行委員が(公財)ソロプチミスト日本財団
令和3年度社会ボランティア賞を受賞しました。

(経緯) 当会の会員であります田辺文子さんが会長を務める国際ソロプチミスト甲府の副会長の矢崎京子さんから3年前
お話を頂き、同会から(公財)ソロプチミスト日本財団令和3年度社会ボランティア賞へ小口弘毅(甲府一高あおぞら
会実行委員)の推薦をして頂いたところ、日本財団選考委員会における選考の結果、受賞者となり昨年11月2日に京都
において同財団より表彰を受けました。同時に学生ボランティア賞を山梨県立笛吹高校植物研究部が受賞しました。

社会ボランティア賞は人々の健全な発達に寄与し、又は豊かな人間性を涵養することを目的とする活動への支援
を目的に地域社会のニーズに適合した地域密着型ボランティア活動を継続的に行い、誠実に責任を果たしている人
を称えるものであります。以下、小口弘毅推薦書(文責 露木)の一部分を原文のまま掲載します。

【推薦理由】 山梨県北杜市白州町にある障がい児およびその家族が気兼ねなく宿泊
出来る施設(「あおぞら共和国」)建設・運営への10年に亘る献身的貢献

「小学校以来、60年に亘る友である小口弘毅氏を貴財団の令和3年度社会ボランティア賞の応募者として推薦出来
ますこと、私にとり大きな喜びと誇りであります。生死を彷徨う2度にわたる大病を克服した彼の障がい児者およびそ
の家族に向ける、小児科医師という立場を超えた一人の人間としての赤心からのひたむきな愛の心に対し、私は感
謝と畏敬の気持ちを感じます。彼のその思いと行いは今の時代に大切な事を我々に教えてくれていると思います。」



左 国際ソロプチミスト日本財団 理事長 千 容子氏 中央 小口弘毅 右 田辺文子氏



左写真2枚 ソロプチミスト財団ホームページ<https://www.soro-jpf.net/about/>より



甲府一高あおぞら会 実行委員

2021年12月31日現在の甲府一高あおぞら会の実行委員は以下のメンバーです。(数字は甲府一高卒業年、Sは昭和、Hは平成です)
実行委員を広く募集しています。山梨在住の方、50歳未満の方大歓迎です。

- | | | | | | |
|------------------|-------------------|-------------------|------------------|-------------------|------------|
| 会長
露木和雄 (S45) | 副会長
軽石泰孝 (S50) | 事務局
山本秀彦 (S41) | 会計
田伏純子 (S44) | 監事
谷口百合子 (S36) | |
| 宇野由美子 (S40) | 雨宮俊彦 (S45) | 小口弘毅 (S45) | 飯沼温子 (S45) | 小口博 (S47) | 保延義仁 (S50) |
| 斎木裕子 (S50) | 高橋久 (S51) | 青柳均 (S51) | 岡垂佐子 (S59) | 上松裕之 (H3) | 保坂香子 (H3) |

編集・発行・お問い合わせ

〒252-0233 神奈川県相模原市中央区鹿沼台1-7-7おぐちこどもクリニック内 甲府一高あおぞら会
FAX:042-786-4132 ホームページ:<https://ymkp.net/aozora/> 事務局mail:aozora@ymkp.net

ホームページとフェイスブック

入会のお申し込み以外にも、活動の様子、草刈り
ボランティアやイベントなどの日程や詳細は、ホーム
ページとフェイスブックにてお知らせしています。
チェックしていただき、活動にぜひご参加ください。



←ホームページ

